

オリンピック再考

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

1964年の東京オリンピックから50年経て、2020年に再度のオリンピックが開催されます。メインスタジアムの「新国立競技場」プランの白紙撤回やエンブレムの類似問題など、負の話題ばかりのマスコミ報道につくづく嫌気が差しています。そこでオリンピックの原点を再考し、違った角度から東京オリンピックを盛り立ててみたいと思います。

古代オリンピックとは

歴史的には、紀元前776年に最初のオリンピックが開催されたといわれています。現存する最古の文書がオリンピックの勝利者リストであったこと

から、「歴史の幕開け」という言葉はスポーツの起源、とりわけオリンピックと同義語です。

オリンピックに出場するアスリートたちは、ギリシャ各地からやってきましたから当時は、さまざまな土地で競技会が開催されていたと推察できます。しかし、エジプトではすでに紀元前3000年ごろには競技が始まっていたといえます。これらの競技は、エジプト王族や上流階級の娯楽としての位置づけで、ギリシャのそれとは異なっていました。それではギリシャの競技は、どのような目的を持っていたのでしょうか。

“健全な精神は、健全な肉体に宿る”というフレーズを皆さんご記憶でしょう。心身を最大限に鍛えあげ、超人的なパワーで不可能を可能にするというスポーツ本来の純粋な理想に基づいた「アスリート精神」が定義され、さらにルールも設定されました。

詩人ピンダロスはうたっています。

“オリンピックは、すべての競技の中で、最も光り輝いている。太陽が宇宙の中で最もまばゆいように”

古代オリンピックの聖地は「オリンピア」

ここで4年に1回開催されました。こうしたルール

や競技種目を決めたのはヘラクレスだといわれています。競技はいろいろ変化していますが、最初のころは「徒競走・ボクシング・レスリング・円盤投げ」などでした。なかでも一番重要なことは、「オリンピックの開催中は、すべての国家が戦いをやめる」というルールがあったことです。休戦の掟を破った都市国家は、理由のいかんにかかわらず、ギリシャ世界から追放されるという厳しいルールでした。オリンピックの開催地が移動するようになったのは近代オリンピックが復活してからです。

古代オリンピックは293回続いた

やがてローマ帝国が勃興してギリシャはローマに占領されました。ローマがキリスト教を国教と決めたのが392年ですが、その翌年の393年を最後に異教の祭典であるオリンピックは廃止されました。紀元前776年に始まったオリンピックは293回続いたということです。近代オリンピックとして復活するまでの約1500年間は深い眠りについていました。

1896年近代オリンピックとして復活

フランスのクーベルタン男爵がオリンピックを復活したことは、皆さんよくご存知と思います。第1回大会は、歴史にちなんでギリシャのアテネで開催されました。博愛主義者の男爵は、彼の研究によって古代ギリシャ人の価値観を深く理解し、「スポーツによって人類の心と身体がバランスよく高められていくことを再発見」しました。近代オリンピックの象徴である五輪のマークは、クーベルタンが考案しました。世界5大陸（青：オセアニア、黄：アジア、黒：アフリカ、緑：ヨーロッパ、赤：アメリカ）と、五つの自然現象（火の赤・水の青・木の緑・土の黒・砂の黄色）と、スポーツの5大鉄則（情熱・水分・体力・技術・栄養）を原色5色の5つの重なり合う輪で表現したものです。

本来彼は、パリで開催したかったようですが、ギリシャの要望を受け入れてアテネに譲ったそうです。第1回大会には多くの国が参加し、311人の選手が出場しました。イギリス・フランス・ドイツ・ハンガリーから81名、遠くアメリカから14名も参加したそうです。残りはギリシャの選手でした。

ヒットラーが政治に利用

1936年のベルリン大会(第11回)は、ヒットラーに指揮された大会でした。ドイツの国威発揚を徹底的に演出しました。初めて聖火リレーを実施。聖火をアテネで点火してドイツ・ベルリンまで運ぶという、今日のスタイルです。女性監督(レニ・リーフェンシュタール)による記録映画「民族の祭典」は映像によるプロパガンダとして威力を発揮しました。

なお、ドイツでは1916年の第6回大会が予定されていましたが、第1次世界大戦で中止になっていました。1940年の東京大会と1944年のロンドン大会も第2次世界大戦のために中止になりました。1948年のロンドン大会には日本とドイツは出場できませんでした。それ以降のオリンピックは、政治に左右されるようになりました。

1968年のメキシコ大会では、黒人差別を訴える場と化し、1972年のミュンヘン大会では、アラブのゲリラによるイスラエル選手に対するテロ事件。1976年のモントリオール大会になると、ニュージーランドのラグビーチームの南アフリカ遠征に反対して、アフリカ諸国22か国がボイコット。そして、1980年のモスクワ大会では、ソ連のアフガニスタン侵攻に反発したアメリカ・西ドイツ・日本などの西側諸国が相次いでボイコットをしました。1984年ロサンゼルス大会では、東ヨーロッパ諸国が報復ボイコットを行なうなど、古代オリンピックの精神は忘れられてしまいました。

商業主義化したロサンゼルス大会

大会組織委員長のピート・ユベロス氏は、一業種一社のスポンサーを募って高額な料金を集めたり、テレビ放映料を吊り上げるなど、オリンピックをビジネス化しました。アマチュアとプロ選手という概念(オリンピック憲章にはプロ・アマの規定はない)も消えてしまいました。競技場建設にも莫大な資金を投入するようになり、その結果発展途上国では開催できなくなるなど、最近問題になっています。新国立競技場の「白紙撤回問題」などもその影響があるのではないのでしょうか。

日本人が命名した「パラリンピック」

パラリンピックの原点は、第2次世界大戦の傷病

兵のリハビリを目的にした大会だそうです。1960年のローマ大会を第1回大会としています。そして1988年のソウル大会から正式に「パラリンピック」の名称がつけました。ところで「パラリンピック」の名称は、日本人が考えたということをご存知でしょうか。残念ながら考案者の名前は不詳です。

冬季オリンピックはシャモニー大会が始まり

夏の大会から遅れること28年、1924年のシャモニー(フランス)大会から冬季大会がスタートしました。雪や氷が必須ですから開催地は限られません。日本も1972年の札幌、1998年の長野大会と過去2回開催しています。当初は、夏季・冬季が同年開催されていましたが、1992年のアルベールヴィル(フランス)の次に、1994年リレハンメル(ノルウェー)大会から夏季・冬季が2年ごとになりました。夏冬の同時開催だと参加費用がかさみ、また冬季大会の盛り上がり欠けるといったことが理由のようです。

1964年東京オリンピックの思い出

東京大会は、戦後復興・高度成長の牽引車だったような気がします。「オリンピックのため」というフレーズは、水戸黄門の印籠のような威力があったのではないのでしょうか。10月10日の朝は、前夜の雨がウソのような快晴でした。青空に五輪がくっきりと浮かび上がった瞬間は、一生忘れないシーンです。女子バレーの優勝も快挙でした。父から閉会式のチケットをもらい会場へ。開会式の入場行進とは違って変わり、選手は国境を越えてバラバラ行進。「これが古代オリンピック精神」なのだと感激しました。

2020年の東京オリンピックはどんな姿になるのでしょうか。直近の世界を見渡せば、いたるところで紛争が起きています。宗教・民族・貧富など、原因は数え切れません。古代オリンピックの時代でも、ギリシャ圏の都市国家間の争いやペルシャとの戦い、ローマとの攻防戦などが続くなかでも、オリンピック期間中は戦いを中止した事実は重いと思います。勝敗にこだわらず、“健全な精神は、健全な肉体に宿る”の精神を再認識して、犯罪のない「安心・安全な」日本を復活して、外国の観光客を迎えようではありませんか。